

2026年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。なお、問題作成上、表記を改めたところがあります。

ここからは、いわゆる「説明」についてお話をしていきます。始めるにあたって、巷^{ちまた}でよく言われる「本当にわかっていれば、誰にでもわかるように説明できるはず」「難しいことを誰にでもわかるように説明してくれる人こそ、本当に頭のいい人だ」という言説について考えてみたいと思います。①実は、私はその説をあまり信じていません。

この世の中に、物事を深く理解していて、なおかつ平易な説明ができる人が存在することは確かです。また、説明対象のことをよくわかっていないせいで、上手な説明ができない人も確かにいます。

しかし、「本当にわかっていている人」全員が誰にでもわかるように説明できるかというと、そうではないと思います。むしろ、私の知る限り、難しい物事を理解している人が平易な説明を苦手とするケースは珍^{めず}しくありません。またその一方で、②専門家から見ればたいして理解していないのに、大勢の人々から「この人の説明はわかりやすい」という評価を得る人もいます。

つまり、「その分野の知識レベル」と「説明のわかりやすさ」は別物だということです。まとめると、世の中には次の四種類の人たちがいることになります。

- A. その分野の知識レベルが高く、説明がわかりやすい人
- B. その分野の知識レベルが高く、説明がわかりにくい人
- C. その分野の知識レベルがさほど高くなって、説明がわかりやすい人
- D. その分野の知識レベルがさほど高くなって、説明がわかりにくい人

「Cの人たちって、本当にいるの？」と疑問に思う方もいらっしゃるかもしれないので、实例を挙げておきましょう。何を隠^{かく}そう、私はその一人です。

私はこれまでに何冊かの一般^{いっぱん}向けの書籍^{しよき}を出版してきました。その中には、自分の専門分野である言語学に関する本と、少し専門から外れた数学や情報科学の本が含ま^{ふく}れます。そして、読者の皆^{みな}さんから「わかりやすい」と言っていただけるのは、どちらかというと後者の方が多いのです。つまり、よく知っている分野についての説明よりも、たいして知らない分野についての説明の方が「わかりやすい」という評価を受けているわけです。

なぜそのようなことが起こるのかというと、専門から外れる分野に関しては、説明をする私の知識レベルと、説明を受ける人々の知

識レベルの差が小さいからだと思います。知識レベルが同じくらいだと、相手が何を知らたいと思っているのか、どういうところで引っかかるのがよくわかります。そういったポイントを押さえながら説明するので、「わかりやすい」と思っていただけなのでしょう。テレビやYouTubeなどを見ていると、「何かの説明」という部分に関しては、その筋の専門家である大学教授や研究者よりも、わかりやすく教えてくれる解説者や芸人さんの方が重宝されていることがわかります。つまり人間は、自分にわかるように説明してくれる人の説明を聞きたがるということだと思います。

私のもったいないと思うのは、先の分類のBの人たちです。たとえ高度な知識を持っていても、わかりやすい説明ができないと、そのことが専門外の人々に伝わりません。Cの立場の人々は、説明自体はわかりやすくても、そのすべてに責任が取れるわけではありません。（念のためお断りしておきますが、私が専門外の本を書くときは、必ずその分野の専門家の人にチェックしてもらっています。）専門知識を正確に伝えるためにも、BからAに移る専門家が増えるのが望ましいと思います。ただし問題は、「専門分野の勉強だけを頑張っていても、自然にわかりやすい説明ができるようにはならない」ということです。

Bの人たちがAに移るためには、どういうことに気をつけなければならないのか。以下では、私が個人的に思うところを書いていきます。ちなみに、以下で言う「専門家」とは、学術的な分野の専門家にかぎらず、ありとあらゆる分野や業務について「それを熟知している人」という意味で使いますのでご注意ください。

そもそも「説明」とは何かについて考えてみましょう。私は「説明」とは、「自分の知っていることを、相手の頭の中で再現してもらうこと」だと考えています。ただし、そのために必ず守らなくてはならないルールがあります。それは、「相手がすでに知っている物事を材料にして、自分の知っていることを再現しなければならぬ」ということです。

当たり前のことですが、誰でも新しいことを学ぶときには、すでに知っている物事を手がかりにします。私たちが知らない言葉を辞書で引くのは、辞書ではその未知の言葉の意味が、私たちがすでに知っている言葉で説明されているからです。もしも辞書の説明が知らない言葉だらけだったら、新しい言葉の意味を知ることができないでしょう。

場所を説明するときも同じです。自分が今いる場所まで相手に来てほしいとき、もし相手がその場所のことを知っているなら、地名や店名を言えば済みます。しかし、相手がその場所を知らない場合は、相手が知っている場所を基準にして、「〇〇駅の南口を出て商店街をまっすぐ進んで突き当たり」などと説明する必要があります。

お笑いコンビ・バイきんぐの有名なコント「帰省」の中で、「パナマ人と結婚した」と言う娘（西村さん）に対し、父親（小峠さん）が「どこよ！ パナマどこよ！」と詰め寄るシーンがあります。そこで西村さんは「コスタリカの横よ！」と答えるのですが、小峠さ

んは「それどこよ!」とツッコみます。そもそもコストリカの場所がわからない人には、「パナマはコストリカの横にある」という説明は意味をなさないので。

③ 専門家が非専門家に対して説明するときの難しさの一つはこの点にあります。専門家の頭の中には、自分の分野の物事について簡潔に語るための材料が豊富に揃っています。たとえば専門用語はその一つです。専門用語には膨大な情報が圧縮されており、正しく使いこなせるようになるには、その概念にまつわる歴史的・技術的な文脈や、専門家たちの問題意識などを頭に入れなければなりません。しかし、いったんそれができてしまえば、専門家どうしの世界では最低限の説明で話が通じるので、けっこう楽です。私は専門家の世界というのは、「④ 標高の高い場所にある快適な都市」のようなものだと思います。行くのはいへんですが、いったんたどり着けば楽に過ごせる。そういう土台の上でこそ、専門用語による簡潔なコミュニケーションが可能になっているわけです。

自分の専門分野や業界の外の人と話す機会がほとんどない人は、この点に注意する必要があります。同業者とかかわる時間が長くなればなるほど、同業者の間で使われる用語や知識が、それ以外の人たちに通じないことを忘れてしまうからです。こちらの説明を聞く人が何をどれだけ知っているかをきちんと考慮しないと、専門用語を説明なしで使ってしまったら、基礎的な知識の導入を飛ばしてしまったりして、相手に聞く気をなくさせてしまいます。

他人の視点に立つ、また他人の知識を考慮に入れることについては、得意な人とそうでない人がいます。「自分がどちらであるかわからない」という人は、「道案内が得意かどうか」を考えてみるとよいと思います。

ために、「自分が住んでいるエリアに初めて来る人」を思い浮かべて、その人に最寄りの駅やバス停からご自宅までの道順を教えてください。電車やバスを降りた人が最初に目にする風景はどんなもので、何が目印になりうるか、またどのような言い方をすれば最低限の知識でゴールまで導けるかを考えるのです。自分にとってはわかりきった道順や手順を、まったく知識のない人に説明するのは、他人の視点や知識を想像する上で良い練習になります。

ただし、道案内のしかたを考えると、「おおざっぱでもいいだろう」という思いがあると、あまり練習になりません。そういうときには、説明の相手として「日本語の文字が読めない人」や「日本の街並みを見慣れない人」を想定してみるのには有効です。そうすると、「〇〇と書かれた看板」とか「銀行」、「コンビニ」といった言葉を使えなくなるので、目印について述べるために別の方法を考えなくてはなりません。また、小さい子どもに説明することを考えると、「正面」や「突き当たり」といった言葉を言い換える必要も出てきます。こんなふうに、自分で難易度を変えながら、わかりやすい説明を考えてみるのです。ちなみに私の道案内はかつて知人から「わかりにくい」と言われてきわめて不評でしたが、練習のおかげか、最近ではだいぶましになりました。

(川添 愛「わかってもらう」ということ 他人と、そして自分とうまくやっていくための言葉の使い方」)

問一 傍線部①「実は、私はその説をあまり信じていません」とありますが、そのように筆者が言うのはなぜですか。解答欄に合うように本文中から三十字以内で抜き出しなさい。

問二 傍線部②「専門家から見ればたいして理解していないのに、大勢の人々から『この人の説明はわかりやすい』』という評価を得る」とありますが、そのようなことが起こるのはなぜですか。

問三 傍線部③「専門家が非専門家に対して説明するときの難しさの一つはこの点にあります」とありますが、「この点」が指す内容を答えなさい。

問四 傍線部④「標高の高い場所にある快適な都市」とありますが、これは専門家どうしの世界の、どのような特徴をとえて言っているのですか。七十字以内で答えなさい。

問五 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 限られた業界の中で高度な専門用語を使いこなす専門家は、その領域の専門知識がない人たちの立場を想定してわかりやすく説明することを常に苦手としている。

イ YouTubeでわかりやすい説明をする芸人が重宝される一方、お笑いコンビのバイきんぐは説明に失敗するコントを演じ、そうした芸人の批判を展開している。

ウ 知識レベルがさほど高くない上に説明もわかりにくい人は、基礎的な知識を学ぶことによって、説明するための材料を豊富に手に入れるとよい。

エ 他者の視点・知識を想像するには道案内のしかたを考えることが有効で、案内する対象を具体的に想定しながら、わかりやすくなっているか思案するとよい。

オ 何かを説明するときには、相手の立場に立って考えることはもちろんだが、まずは自分の知識と立場をはっきりと相手に伝えることから始めるとよい。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

「わたし」（小栗真子）は、小学校の合唱クラブに所属する六年生で、パートリーダーをまかされている。昨年、全国大会で金賞をのがし、今年こそはという思いのもと、クラブは指導担当の長谷川先生、六年生で部長の穂乃花を中心に厳しい姿勢で練習を行っていた。だが、その雰囲気（ふんいき）に耐えられなくなった児童もおり、「わたし」も胃痛で保健室を訪れることがあった。一方、五年生の朔（はじめ）は、合唱クラブには所属せず、商店街の人たちと「半地下合唱団」という団体で楽しく練習をしていて、「わたし」もそこを訪れるようになっていた。問題文は、朝、合唱クラブが練習した後のミーティングの場面からはじまっている。

「練習日を増やす？」

聞き返したわたしのことを、穂乃花は、にらんだ。まちがはなく、にらんだ。

「みんなもわかってるよね？ 今年の合唱クラブが去年に比べて下手だって」

音楽室を見回した穂乃花に、「そんなことないよ」と言う子はいなかった。

去年の自分たちより、声の広がり弱いような、歌っていてもどこか空回りしているような感覚が、みんなにもあるのだ。とどくはずの場所に、何度やっても手がとどかない感じがした。

朝練後のミーティングは、一気にどんよりと濁（にご）った。練習のときから長谷川先生の注意ばかりで、もともといい空気でもなかったのだけれど。

六月も後半に入り、梅雨（つゆ）も始まって、ただでさえ毎日雨模様で空気もジメジメしているから、よけいに嫌（いや）な雰囲気になる。

「去年と同じ練習量でダメなら、練習を増やすしかないでしょ？ 長谷川先生には、練習のない日も音楽室で自主練していいって、許可をもらったから」

「練習のない日に自主練って、要は学校がある日は毎日練習するってこと？」

勘弁（かんべん）してよという顔で聞いたのは、アルトの勇人（ゆうと）だった。

「塾（じゅく）があるとか、習いごとがあるとかって言うんでしょ？ そういう人は、塾や習いごとがない日にしっかり自主練してください」

「いや、でもさあ……」

「塾も習いごともない日に練習したくないってことは、練習が面倒くさいってこと？」

勇人が押し黙る。穂乃花はたたみ掛けるように続けた。

「勇人さ、歯医者があるからって土曜日の練習休んだけど、本当に歯医者だったの？」

「何だよそれ。サボったって言いたいなの？」

「疑われるような態度を取るのがいけないと思う。みんなもそう思わない？」

言い放った穂乃花の視線は冷たくて、聞いているわたしの背筋まで、ヒヤリとした。穂乃花の言葉に「そう思う」「サボりたがってるようなこと言うからだよ」と同調する声上がる。

でも、黙ることしかできない子も、何人もいる。穂乃花や、ほかの上級生、穂乃花の意見に賛成する同級生を前に、「練習日を増やすのは反対です」と堂々と言うなんて、無理だ。

そうやって、わたしは、わたしに言い訳をする。六年生なのに。気が進まない子を代表して、意見を言うことができる立場なのに。

①むしろ卑怯だ、こんなの。わかっていて、黙ってやり過ごそうだなって。

——言いたいこと我慢してまわりに合わせるよりは楽だし。

五月、夕暮れの商店街で（注）藤野先輩が言っていたことが、ふと落ちてくる。雨がぱらつく空から、天井をつき抜けて、わたしのの中に。

「とにかく、七月から練習日を増やすから。塾や習いごとがない日は必ず参加してください」

そう言って、穂乃花はミーティング終了の号令をかけた。直後、チャイムが鳴る。朝の会の始まりを告げるチャイムだ。みんなは慌ただしくランドセルを背負って、音楽室を出ていった。

カギ閉め当番の子からカギを預かって、わたしは穂乃花を呼び止めた。

「ねえ、穂乃花。練習日を増やすって話なんだけどさ」

立ち止まった穂乃花が、ぎこちなく、ふり返る。

「もう一回、考え直してみてもいいんじゃないかな？ 毎日毎日合唱ばかりじゃ、しんどくなっちゃう子もいると思うんだ。息抜きも必要っていうか——」

「なに？ 真子も『ゆとりがほしい』みたいなこと言うの？」

②ああ、やっぱり。こういう反応をされてしまうんだ。

ミスをした子を責めるような顔と口調で、穂乃花は「パートリーダーなのに、真子には何も見えてないんだね」と言い捨てる。

「ゆとりを持って練習するとか、みんな楽しく練習するとかってさ、上手な人がやることでしょ？ わたしたちは、去年金賞を取れなくて、しかも今年は去年よりずっと下手なんだよ？ ゆとりなんて言ってる場合？」

「でも……」

「わたしたちは、頑張^{がんば}って、うまくならないといけないんだよ。去年、先輩たちとも約束したじゃん。今年は絶対に金賞を取るって」

「それはわかってる。わかってるよ」

「それとも、真子もサボりたいの？」

どうすればいいんだろう。穂乃花に「それはちがうよ」と言いたいののに、何が、どうちがうと言えればいいのか、わたしの中に言葉がない。

そのとき、音楽室の引き戸が静かに開いた。古びたレールの上を戸が滑^{すべ}り、きゆるっ、きゆるっと言を立てる。光をよく集めるアーモンド形の目が、こちらをのぞきこむ。

「すみませーん、一時間目、五年二組が音楽で使うんですけど」

素知らぬ顔で「入ってもいいですか？」と笑った朔^{はじめ}くんに、穂乃花が時計を確認^{かくにん}する。

「やば、朝の会終わるじゃん」

寝坊^{ねぼう}した日のお父さんみたいな顔でつぶやいた穂乃花は、「じゃ、そういうことだから」と話を無理矢理切り上げた。

「パートリーダーの真子がそんなじゃ、みんな気がゆるむでしょ。自覚持ってよ」

ランドセルを背負い直し、穂乃花は駆け足で音楽室を出ていく。入れ替^かわるように、朔くんのクラスの子が続々とやってきた。

「カギ、預^{たくわ}えようか」

朔くんが、わたしが握^{にぎ}りしめていた音楽室のカギを指さす。「ああ」と「うん」と中間の相づちを打って、カギを手渡^{てわた}した。

「陰悪^{いんあく}って感じだったね」

「穂乃花は部長だから、コンクールのプレッシャーを人一倍感じてただけなんだよ」

「でも、それで他人を傷つけたり、まわりの人の負担になることをしてもOKってことにはならないんじゃないの？」

③朔くんの言葉に、わたしは息をのんだ。

さっき、穂乃花にそう言えたらよかったのかもしれない。

「大体さ、どうしてそんなに全国大会で金賞を取りたいわけ？」

「そりゃあ、去年取れなかったからだよ」

「金賞を取れないと、真子ちゃんはどうなるわけ？」

「どうなる、って……」

合唱クラブで活動して、コンクールに出てるんだよ？ いい成績がほしい、みんなで「やったー！」って言い合いたい。当たり前と思うのは、おかしい？

言葉にできなかった。でも、朔くんには思っていることが伝わってしまったらしい。

「俺われから見るとね、真子ちゃんたちが、どうして金賞にこだわるのか、よくわからないんだよね。だって真子ちゃんたち、合唱クラブじゃなくて、コンクールで金賞を取るためにつらい思いをするだけのクラブになってるじゃん」

「ちがうんだよ！」

自分が思っていたより、ずっと大きな声が出してしまった。音楽室に集まっていた五年二組の子の視線が、いっせいに、わたしと朔くんに集まる。

「合唱団で楽しく歌ってるだけの人にはわからないだろうけど、全国大会に行くとか金賞を取るとか、わたしたちにとっては、大事なんだよ。そのために頑張ってるんだよ」

言ってから、朔くんの言葉が正しいんだと思ひ知る。

本当のことを言われたから、とっさに「ちがう」と否定したくなってしまう。見たくないものを、必死に両手でぬぐうみたいに。朔くんは、大きな目をさらに大きく開いて、わたしを見つめていた。

見ないでよ。そう、ふり払はらいたくなってしまう。

「真子ちゃんってさ」

あのきれいなボーイ・ソプラノを響ひびかせる口が、わたしの名前を呼ぶ。

「楽しくやるってことを、頑張らなくていいってことだと思ってるよね。根っこのところ、あの怖い部長こわさんと同じだよ」

朔くんの声に、怒いりはにじんでなかった。とても静かで、これから歌でも歌うみたいに冷静だった。なのに、するどくて胸がヒヤリとする。

「朔、どうしたの？」

教室の前の方にいた男の子が、朔くんを呼んだ。どうやら朔くんの友だちらしい。五年二組の担任の先生が「授業始めるぞー」と入ってきてしまい、わたしはあわてて音楽室を飛び出した。

ホツとした。朔くんから、逃げる口実ができた。

昇降口から吐き出された色とりどりの傘とランドセルは、バラバラの速度でゆらゆらと校門に向かって行く。そのカラフルな流れの中で、④わたしの足取りは重かった。

今日は火曜日だ。半地下合唱団の練習の日。

昨日の朝、大声で言い返してしまってから、朔くんとは顔を合わせてない。(注2) Bar HAJIME に行って、どういう顔で会えばいいかわからない。

そのときだった。

「真子ちゃん！」

保健室の窓から、南先生が「ちよつと来て」と手を振っていた。外廊下側のドアから靴をぬいで保健室に入ると、帰り支度をすませた(注3)優里がイスに腰かけていた。

「真子ちゃん、柚原とケンカしたって本当？」

南先生の言った「柚原」という苗字と朔くんがつながるまで、少し時間が必要だった。

「合唱クラブを、金賞を取るためにつらい思いをするだけのクラブって言ったんだって？」

「ケンカっていうか、図星を指されたわたしが、一方的に怒ったというか、何というか……」
肩を落としたわたしに、優里はランドセルを背負って立ち上がった。

「今日、火曜日でしょ？ 朔くんから真子ちゃんへの伝言んだけど、『練習は無理して来なくていいからね』って」

「それって、わたしにもう合唱団に来るなって意味？」

「そうじゃなくて、真子ちゃんは『練習だからちゃんと参加しなきゃ』って義務感でいやいや来ようとするかもしれないから、来たくないなら来なくていいって」

うう、まさにその通りで足取りが重かったんだけれど、他人に見透かされてたと思うと、なんだかはずかしい。そんなわたしを、南先生が「あははっ」と高い声で笑った。

「たしかに、真子ちゃんは練習と名前のつくものには、真面目に参加しちゃうだろうね」
だって、練習だもの。

当たり前にそう思う自分と、首をかしげてしまう自分。二人の小栗真子が、わたしの中でぐちゃぐちゃになる。

「練習とか、課題とか、そういうのに真面目になるところ、自分のいいところだと思ってたし、お父さんやお母さんから長所だつて言われてきたんですけど……言われたことを何も考えないでやるしかできない人間ってことだったのになって、朔くんに言われて気づきました」

「うーん、それはちよつと、ちがうかな」

うつむいたわたしの肩を、南先生がポンと一度だけ優しくたたいた。

「人間の長所と短所って、裏表でつながってるの。あっちに行ったら長所でも、こっちに来たら短所になっちゃったりする」
わたしの前で、てのひらを何度もひっくり返しながらか、先生は続ける。

「長所短所だけじゃなくて、人の考え方も同じだね。一つの考え方がどこでも正しいなんてこと、滅多にないから」

「でも、わたしは朔くんの言葉に、グサツてきたんです。図星を指された、っていうか」

「まあまあ、あんまり難しく考えないことだよ」

南先生の言葉は、頭では理解はできた。

⑤でも、胸の奥にパチンとはまらなかった。

(額賀 零『ラベンダーとソプラノ』)

(注1) 藤野先輩

半地下合唱団の一員の中学二年生。

(注2) Bar HAJIME

朔の両親が経営する、半分地下にある飲食店。お店の休みの日に、半地下合唱団が練習をする場となっている。

(注3) 優里

合唱クラブの五年生で、「わたし」と同じアルトのパートに所属していたが、練習に来なくなり、年度初めには学校を休むようになった。優里の家を訪問した朔と「わたし」のすすめもあり、保健室に登校するようになった。半地下合唱団にも所属している。

問一 傍線部①「むしろ卑怯だ、こんなの」とありますが、何が「卑怯」なのですか。四十字以内で答えなさい。

問二 傍線部②「ああ、やっぱり」とありますが、「わたし」はどのようなことに対して「やっぱり」と思ったのですか。

問三 傍線部③「朔くんの言葉に、わたしは息をのんだ」とありますが、それはなぜですか。

問四 傍線部④「わたしの足取りは重かった」とありますが、それはなぜですか。

問五 傍線部⑤「でも、胸の奥にパチンとはまらなかった」とありますが、このときの真子についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真子は朔の指摘^{してき}についてもっとよく考えたいのに、南先生があまり深く受けとめるなど忠告してきたことを不快に思っている。
イ 南先生の助言は嬉しいが、年下の朔に自分の気持ちを見透かされた恥^はずかしさから冷静になれず、心の余裕^{よゆう}が持てないでいる。
ウ 朔に図星を指されたという南先生の指摘はその通りだが、それに対する南先生の助言には違和感^{わかん}を覚えて素直^{すなお}に従えずにいる。
エ 朔から無理をして練習に來なくてもいいと言われたが、歌が上手^{うま}くなるためには練習に参加しなければならぬと焦^{あせ}っている。
オ 南先生が言っていることは確かに分かるが、朔から言われた言葉をそう簡単に聞き流すこともできず、納得^{なつとく}しきれないでいる。

【三】 次のカタカナの部分^{部分}を漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|------------------------------|---|---------------------------------------|---|---|
| 1 | 実力をハツキする。 | 2 | この作品はドクソウ ^{ドクソウ} 的だ。 | 3 | お菓 ^{かし} 子をセイゾウ ^{セイゾウ} する工場。 |
| 4 | 合格の口ウホウ ^{口ウホウ} が届く。 | 5 | 準備をしたがトロウ ^{トロウ} に終わった。 | 6 | ジシヤク ^{ジシヤク} を使った実験。 |
| 7 | リコ的な行動ばかりする人。 | 8 | 絹系 ^{絹系} で布をオ ^オ る。 | 9 | 先生をウヤマウ ^{ウヤマウ} 。 |
| 10 | アタタかい部屋に入る。 | | | | |

受験番号

氏名

評点

※ 字数指定のある問題の解答は、句読点や記号も一字にふくみます。

【一】

問一

と考えているから。

問二

問三

問四

問五

【二】

問一

問二

問三

問四

問五

【三】

6	1
7	2
8	3
る	
9	4
う	
10	5
かい	